

平安京右京四条一坊九町跡・壬生遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇一二―八

平安京右京四条一坊九町跡・壬生遺跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京四條一坊九町跡・壬生遺跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物建設に伴う平安京跡・壬生遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

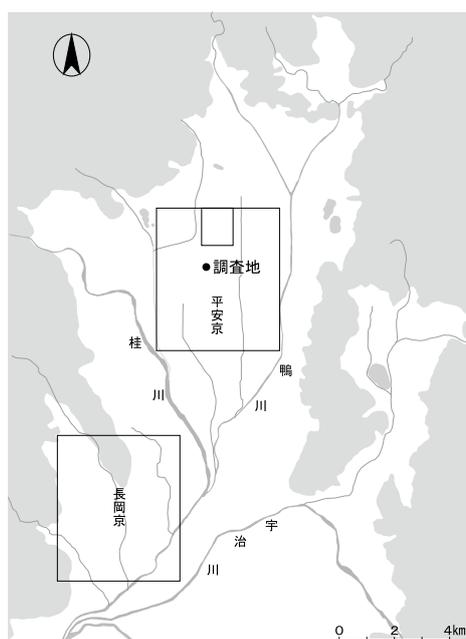
平成24年11月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡、壬生遺跡（文化財保護課番号 11 H 454）
- 2 調査所在地 京都市中京区壬生神明町1 - 48他
- 3 委 託 者 株式会社アクセス都市設計 代表取締役 湯浅勝也
- 4 調査期間 2012年7月30日～2012年9月13日
- 5 調査面積 240㎡
- 6 調査担当者 金島恵一・網 伸也
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」「山ノ内」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 金島恵一・網 伸也
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

(調査地点図)



目 次

| | |
|-------------|----|
| 1. 調査経過 | 1 |
| 2. 遺 構 | 3 |
| (1) 基本層序 | 3 |
| (2) 平安時代の遺構 | 3 |
| (3) 室町時代の遺構 | 5 |
| (4) 江戸時代の遺構 | 6 |
| 3. 遺 物 | 7 |
| (1) 遺物の概要 | 7 |
| (2) 平安時代の遺物 | 7 |
| (3) 室町時代の遺物 | 9 |
| 4. ま と め | 10 |

図 版 目 次

| | | | |
|-----|----|---|------------|
| 図版1 | 遺構 | 1 | 調査区全景（北から） |
| | | 2 | 土坑群28（東から） |
| 図版2 | 遺物 | | 出土土器 |

挿 図 目 次

| | | |
|-----|--------------------------|----|
| 図1 | 調査位置図（1：5,000） | 1 |
| 図2 | 調査前全景（北西から） | 2 |
| 図3 | 作業風景（南西から） | 2 |
| 図4 | 調査区配置図（1：600） | 2 |
| 図5 | 西壁断面図（1：100） | 3 |
| 図6 | 遺構平面図（1：150） | 4 |
| 図7 | 建物1実測図（1：50） | 5 |
| 図8 | 土坑群4実測図（1：50） | 6 |
| 図9 | 平安時代の土器実測図（1：4） | 8 |
| 図10 | 溝状遺構20出土土馬実測図（1：2） | 9 |
| 図11 | 土坑群28出土土器実測図（1：4） | 9 |
| 図12 | 試掘トレンチ平安時代土坑出土土器実測図（1：4） | 10 |

表 目 次

| | | |
|----|-------|---|
| 表1 | 遺構概要表 | 3 |
| 表2 | 遺物概要表 | 7 |

平安京右京四條一坊九町跡・壬生遺跡

1. 調査経過

今回の調査は、京都市中京区壬生神明町に計画された建物建設に伴う発掘調査である。調査地は三条通の南側、中新道通（七本松通）と御前通のほぼ中間に位置する。

調査対象地は、平安京右京四條一坊九町の南西部にあたる。同町内では、過去に2件の調査を行っている。1件は当調査地の北東約50mの地点で実施した、昭和53年度の発掘調査（図1-1）である。調査区の大半は攪乱を受けていたが、平安時代の遺構として、柵もしくは建物と思われる遺構を検出している。もう1件は、昭和53年度調査区の東隣りで実施した、昭和61年度の試掘調査（図1-2）である¹⁾。三条大路の南築地推定地の調査であったが、GL-1.37mにて平安時代の池状堆積を検出したのみで、条坊関係の遺構は検出できなかった。

今回の調査に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が試掘調査を行い、大規模な攪乱を受けながらも平安時代の遺構面や土坑が残存していることを確認した（図4 試掘2トレンチ）。また、遺構の残存状態が良好と判断された敷地



図1 調査位置図（1：5,000）



図2 調査前全景（北西から）



図3 作業風景（南西から）

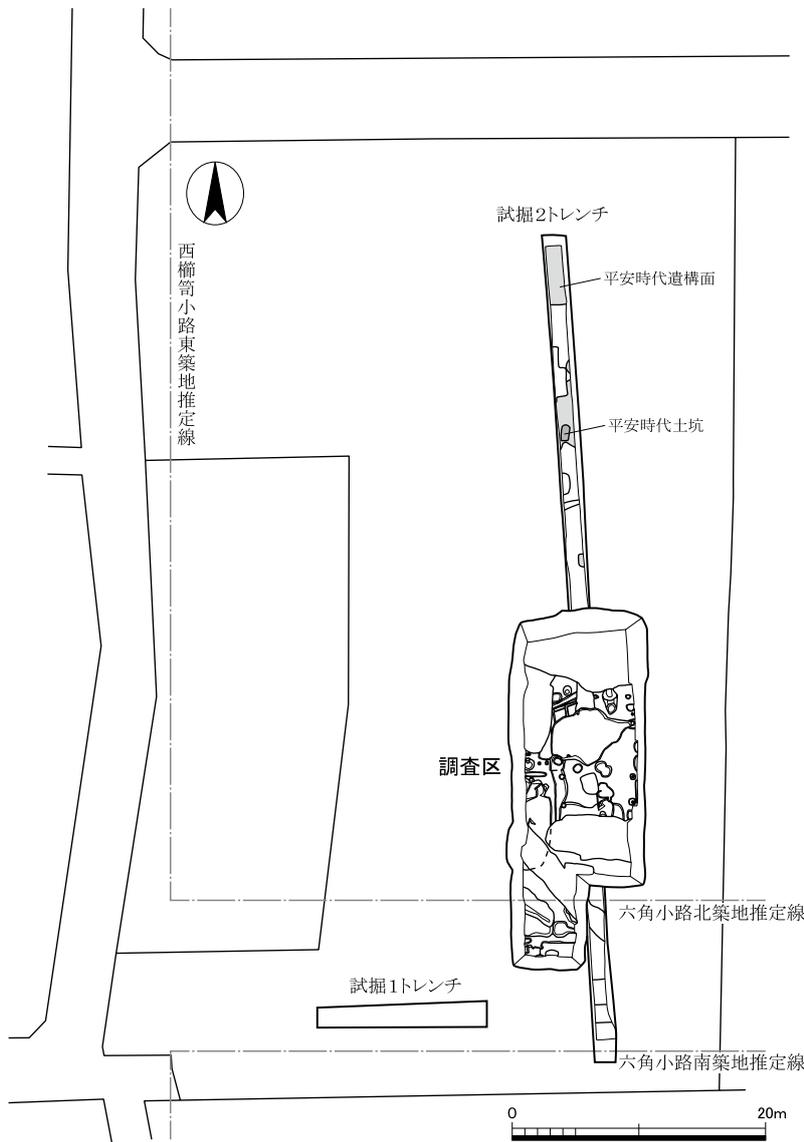


図4 調査区配置図（1：600）

南半部では、六角小路北築地および北側溝の検出が予想されたため、発掘調査を実施することとなった。

調査区は文化財保護課の指導により、六角小路の北築地および北側溝推定地を含むように、東西約10m、南北約27mで南東隅部を欠いたかたちに設定し、発掘調査を実施した。調査の結果、平安時代の建物跡と考えられる南北柱列1棟、室町時代の土坑群、江戸時代の建物跡1棟を検出した。しかし、調査の主目的であった六角小路関連の遺構は、検出できなかった。調査では、これら検出した遺構群の平面および断面記録作業を行い、写真撮影を行ってすべての作業を終了した。

註

- 1) 『昭和53年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 2) 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和61年度』 京都市文化観光局 1987年

2. 遺 構

(1) 基本層序

調査開始前の敷地は、全体が平坦に整地されていたが、周辺の地形は南側に向かって緩やかに傾斜しており、敷地北側では北側道路との高低差がなかったが、敷地南西隅では道路側が約1.5m低くなっていた。調査地は敷地の南半部で、地表より約1.5mまでが近現代の盛土、その下層には江戸時代の旧耕作土層である褐灰色砂泥層があり、その直下は黄褐色粘土～褐灰色砂礫層の地山となった。地山面上に今回検出した遺構が存在する。地山面の標高は、南端で約30.2m、調査区中央では約30.5mであった。

検出した遺構は平安時代、室町時代、江戸時代の遺構である。

(2) 平安時代の遺構

建物1（図7） 調査区東壁部で検出した南北に並ぶ柱列である。柱穴29と柱穴10の距離は約2.1m、柱穴10と柱穴32の距離は約4.2mで、7尺等間に設計されていたと考えられるが、北から

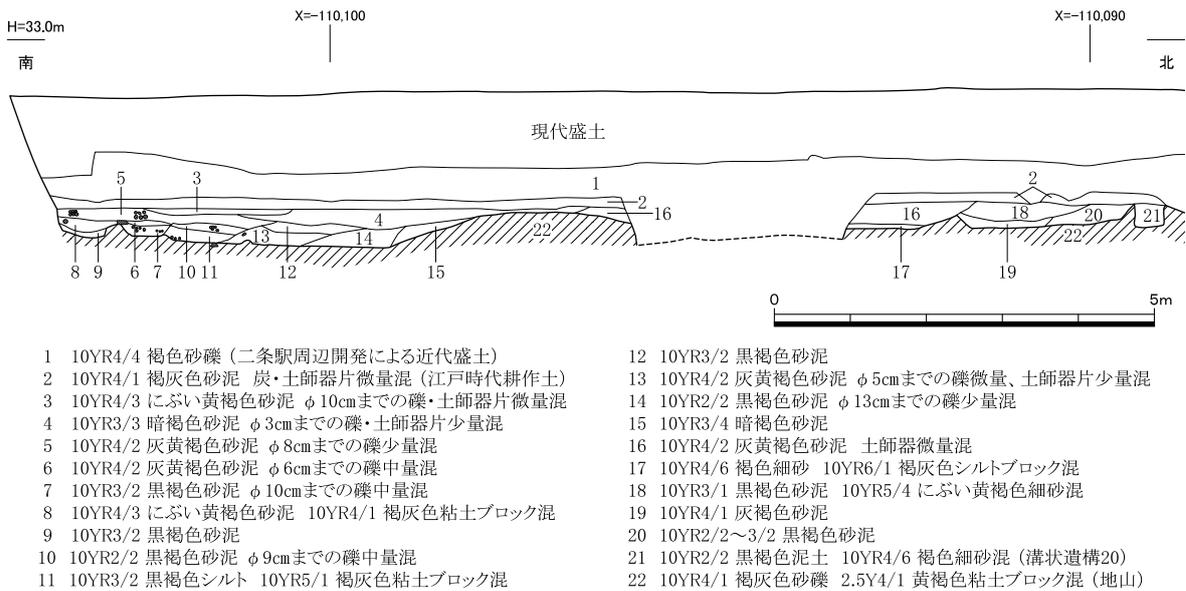


図5 西壁断面図（1：100）

表1 遺構概要表

| 時 代 | 遺 構 | 備 考 |
|------|-------------------|-----|
| 平安時代 | 建物1 | |
| 室町時代 | 土坑群4・22・28、溝状遺構20 | |
| 江戸時代 | 建物2 | |

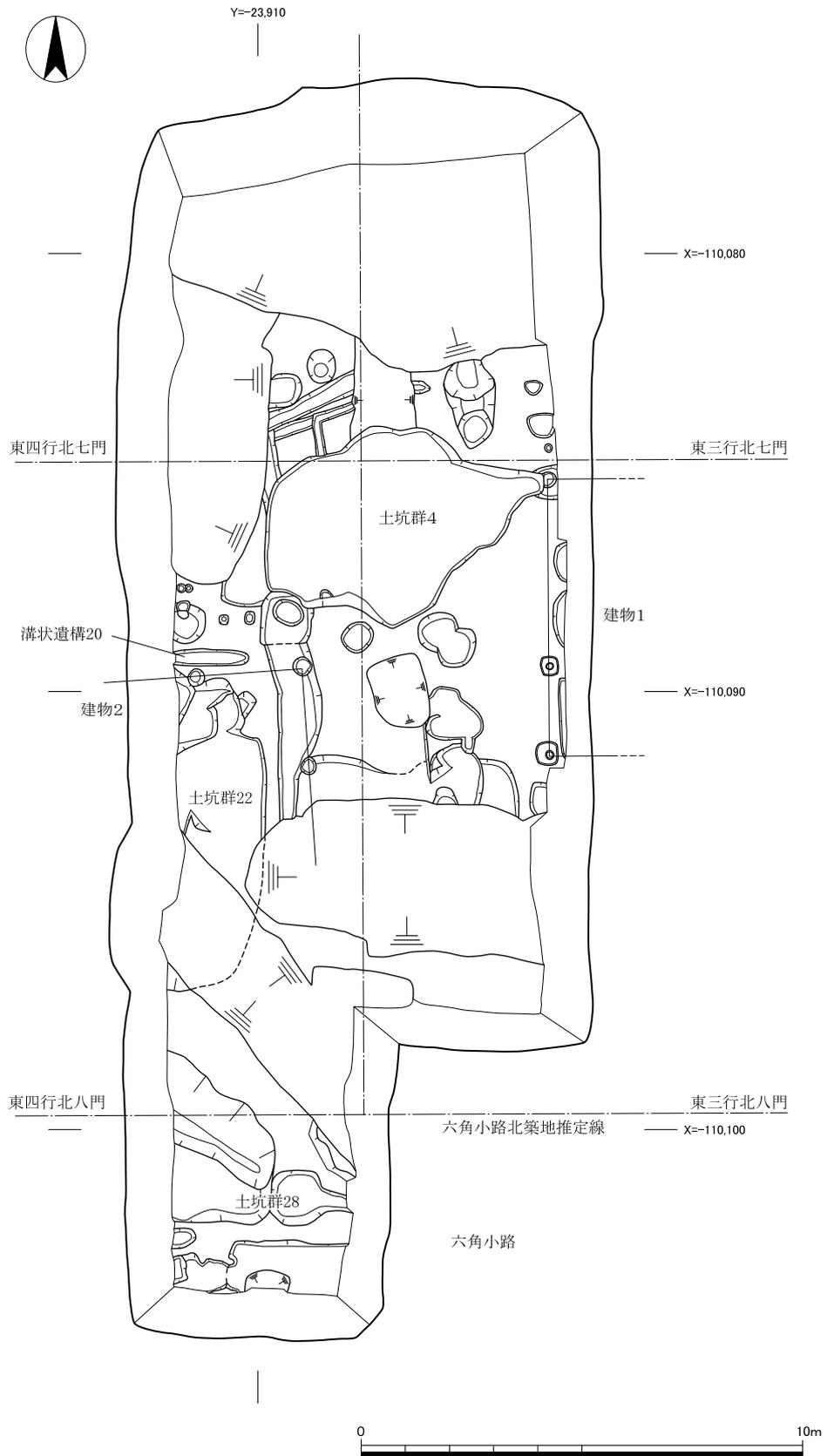


図6 遺構平面図 (1 : 150)

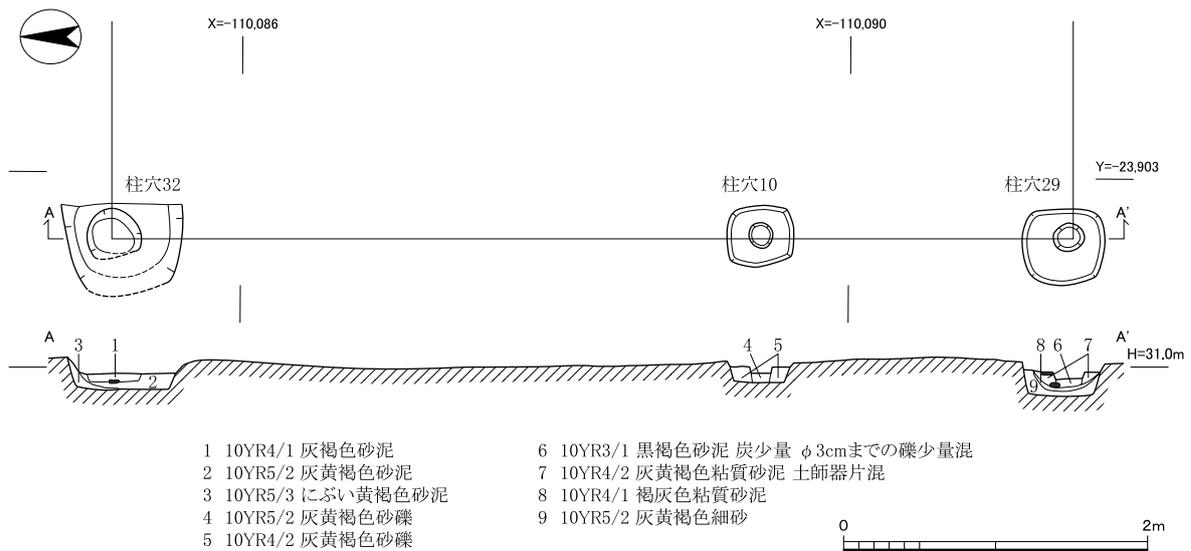


図7 建物1実測図(1:50)

2番目の柱穴は検出できなかった。柱穴掘形は一辺0.4～0.7mの隅丸方形で、深さは0.1～0.2mとかなりの削平を受けていた。柱直径は0.2m前後と考えられる。西側では対応する柱穴を確認できないことから、現状では調査区外の東側に展開する建物の西側柱と考えている。南端の柱穴29からまとめて遺物が出土しており、9世紀第2四半期ころのものと考えられる。

(3) 室町時代の遺構

土坑群4 (図8) 調査区中央やや北寄り検出した不整形な土坑群である。東西約6m、南北約4.5mの範囲で、土坑群が重なりあっていると考えられ、深さは約0.35mと浅く、底面はやや平坦となっている。出土する土器は、ほとんどが平安時代であるが、室町時代の遺物も包含する。

土坑群22 調査区西端部で検出した不整形土坑である。形状や堆積状況から、いくつかの土坑が重なって形成されていると考えられるが、时期的な差は認められず、一括して土坑群として認識した。検出した規模は東西2m以上、南北約7.5mで、調査区外の西に展開する。深さは0.3mほどと浅い。土坑群4と同様に、出土する土器は、ほとんどが平安時代であるが、室町時代の遺物も包含する。

土坑群28 (図版1-2) 調査区南端で不整形な土坑群の北肩部を検出した。これらの土坑群をまとめて土坑群28とする。東西4m以上、南北5m以上の規模で、調査区外に広く展開するものと考えられる。深さは深い所で約0.5mである。六角小路北築地の推定地上で検出しており、これらの土坑群によって削平を受けているのか、下層からも六角小路に関連する遺構は確認できなかった。出土遺物は、他の土坑群同様に、平安時代の土器類が大半を占めるが、室町時代の土器も一定量出土する。

溝状遺構20 土坑群22の北に接して検出した東西方向の溝状遺構である。断面形は方形を呈し、幅は約0.4m、深さは0.25mほどである。東端はY=-23,910.3ラインで途切れ、西は調査区外に延びる。埋土は黒褐色泥土である。土坑群22の北側を画する遺構と考えられる。室町時代の土器

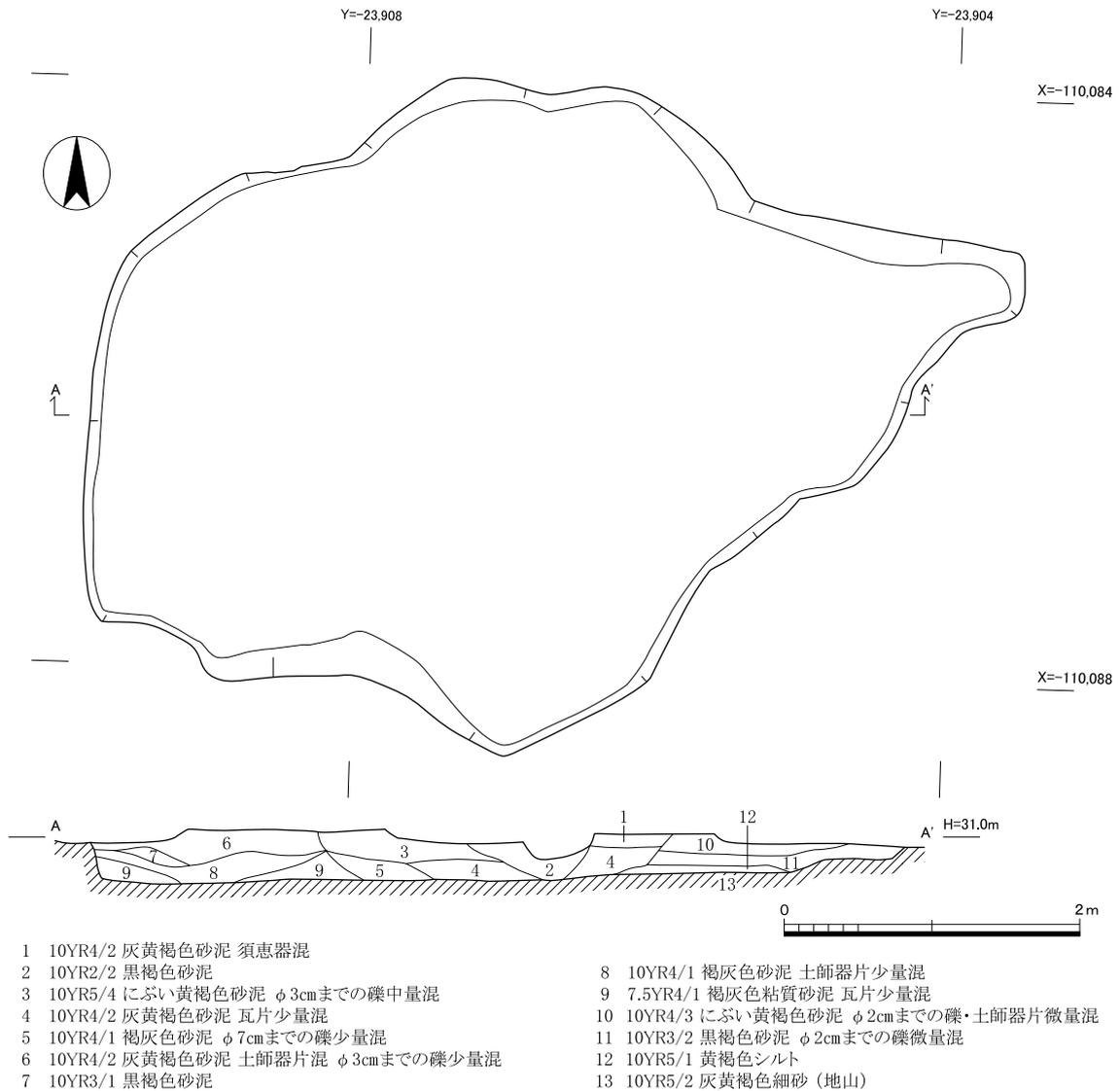


図8 土坑群4実測図(1:50)

小片とともに平安時代の土馬が出土した。

(4) 江戸時代の遺構

建物2 調査区中央西端部で検出した建物の北東隅部である。3つの柱穴しか検出できておらず、南側は攪乱に、西側は調査区外に展開するため全容は不明である。柱間は東西1間が約2.4m、南北1間が約2.3mで、直径約0.4mの円形を呈する。出土遺物から、江戸時代の建物と考えられる。

3. 遺 物

(1) 遺物の概要

今回の調査では、遺物整理箱にして9箱の遺物が出土した。出土遺物には土器類・瓦類・土製品があり、時期は古墳時代、平安時代、室町時代、江戸時代である。出土遺物のうち平安時代のものが大半を占め、室町時代と江戸時代の遺物は少量である。また、古墳時代の遺物は、5世紀後半の須恵器杯身と土師器甕の破片が数点出土したにすぎない。これら古墳時代の遺物は壬生遺跡に関わる資料であるが、図示できる資料はなかった。以下では、平安時代以降の遺物の概要を時代順に述べる。

(2) 平安時代の遺物

平安時代の遺物は、建物1の柱穴29、土坑群4、土坑群22、土坑群28を主とし、調査区全域で出土した。これらのうち、平安時代の遺構に伴う資料は柱穴29出土遺物だけである。なお、土坑群22の北に接して検出した溝状遺構20から土馬が出土している。

柱穴29出土土器(図9-1~4) 土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、白色土器、輸入陶磁器、瓦などが出土した。上層検出中に中世の遺物も出土しているが、下層では平安時代の土器類しか認められないため、上層の中世遺物は混入資料と考えられる。また、瓦には平城宮から搬入された軒丸瓦の破片が含まれているが、文様面がほとんど残っておらず型式は不明である。出土土器は小片がほとんどであり、以下に図示可能な土器を報告する。

1・2は土師器の杯である。口径は13.7cm(1)と15.4cm(2)に復元できる。1・2とも外面はオサエ未調整、内面および口縁部はヨコナデで調整する。にぶい橙色を呈し、微砂粒をやや含

表2 遺物概要表

| 時 代 | 内 容 | コンテナ箱数 | Aランク点数 | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|------|---|--------|---------------------------------|--------|--------|
| 古墳時代 | 土師器、須恵器 | | | | |
| 平安時代 | 土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、土製品 | | 土師器8点、須恵器6点、緑釉陶器4点、白色土器1点、土製品1点 | | |
| 室町時代 | 土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦 | | 土師器3点、青磁1点 | | |
| 江戸時代 | 土師器、染付 | | | | |
| 合 計 | | 11箱 | 24点(1箱) | 1箱 | 9箱 |

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。
Aランク点数は試掘トレンチ出土(図12)の6点を含む。

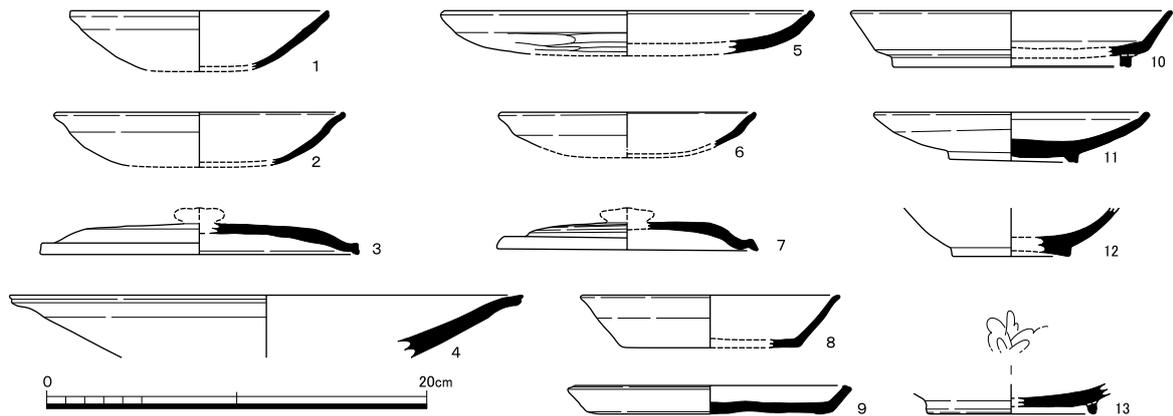


図9 平安時代の土器実測図（1：4）

む。3は須恵器杯蓋である。口径16.8cmに復元できる。上面中央にツマミ付着時の回転ナデが確認できることから、ツマミをもっていたことがわかる。上面の調整は回転ヘラ切り後にナデ、口縁部から内面は回転ナデである。微砂粒を少量含む緻密な胎土で、灰白色を呈する。4は土師器高杯の杯口縁部である。口径は約27cmで、外面はオサエ、口縁部から内面にかけてはヨコナデ痕がある。赤色微砂粒を多く含み、浅黄橙を呈する。

中世土坑群出土土器（図9-5～13） 室町時代の土坑群から多くの平安時代の土器類が出土しているが、攪拌された資料であり大半は接合しない。ここでは、これらの土器群の中で主な資料を報告する。

5は土師器皿である。口径は19.7cmに復元できる。口縁部外面下半から底部にかけて手持ちヘラケズリ、外面口縁部から内面にかけてヨコナデ調整である。赤色微砂粒を少量含み、にぶい橙色を呈する。6は土師器杯である。口径は13.7cmに復元できる。外面底部から口縁部にかけてオサエ未調整、外面口縁部から内面にかけてヨコナデ調整を施す。微砂粒をやや多く含み、にぶい褐色を呈する。

7は須恵器杯蓋である。口径13.7cmに復元できる。欠損しているが、上面中央にツマミ付着時のナデが認められる。上面中央部は回転ヘラ切り後に回転ナデ、肩部は回転ヘラケズリ、口縁部から内面にかけては回転ナデである。白色微砂粒をやや含み、灰色を呈する。8は須恵器杯Aである。口径13.8cmに復元できる。外面から口縁部、内面にかけては回転ナデ、外面底部は回転ヘラ切り後にナデである。微砂粒を少量含み、灰色を呈する。9は須恵器皿Aである。口径約15cmに復元できる。外面底部から口縁部、内面底部までは回転ナデ、外面底部は回転ヘラ切り後にナデ、見込み部は回転ナデ後にナデを施す。砂粒をやや含み、灰色を呈する。10は須恵器皿Bである。口径約17cmに復元できる。外面底部から口縁部、内面底部にかけて回転ナデ、底部高台部には高台付着時の回転ナデを施す。砂粒を少量含み、灰白色を呈する。

11は口縁部がやや内側に屈曲する緑釉陶器皿である。口径14.6cmで、淡くややくすんだ緑釉を全面に施す。素地の外面は回転ナデ、内面はミガキ、底部は削り出し高台を持つ。白色微砂粒をやや含み、灰白色から灰色を呈する。12は緑釉陶器碗の底部破片である。素地重ね焼きの痕跡が内面に

残っている。削り出しの円盤状高台を持ち、外面底部から口縁部にかけては回転ナデ、内面口縁部から見込み部にかけても回転ナデを施す。高台内側には緑釉がなく、高台外側から外面、口縁部から内面見込み部にかけて緑釉が施されている。胎土は緻密で、素地は灰白色を呈する。11・12ともに京都近郊窯産である。13は緑釉陶器の椀もしくは皿で、内面見込み部に宝相華の陰刻花文を有する。貼り付けの輪高台で、外面底部は回転ヘラ切り後ナデ、内面見込み部は回転ナデである。施釉は高台外面までで、外面底部は粗く釉が塗られる程度である。素地は白色砂粒をやや含み、灰褐色を呈する。

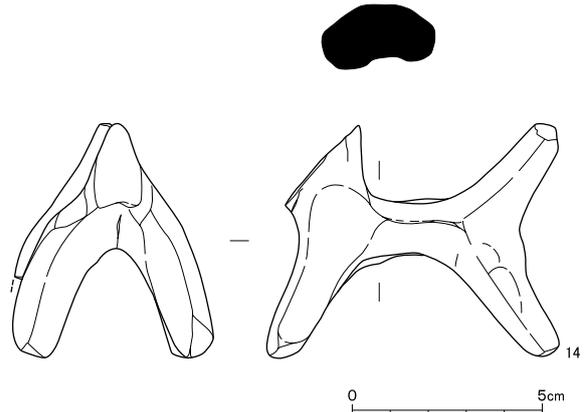


図10 溝状遺構20出土土馬実測図（1：2）

なお、以上の土器類の出土遺構であるが、土坑群4から出土した資料が7・8・11、土坑群22から出土した資料が5・6・9・10・13、土坑群28から出土した資料が12となっている。

溝状遺構20出土土馬（図10-14） 円盤状粘土を折り曲げて成形する典型的な都城系土馬で、頭部と右後ろ脚を欠損する。短く太い脚を八字状に開いて立ち、尾部は後上方に直線的に立ち上がる。赤色微砂粒を多く含み、にぶい橙色を呈する。

（3）室町時代の遺物

室町時代の遺物は小片として出土するのみであるが、今回の調査で検出した土坑や落込みのほとんどが室町時代の遺物を包含する。ここでは土坑群の年代を示す資料として、土坑群28から出土した図示可能な資料を報告する。

土坑群28出土土器（図11-15～18） 15は土師器小皿で、口径6.8cmに復元できる。調整は磨滅して不明瞭だが、外面口縁部から内面見込み部にかけてナデを有すると思われる。胎土は微砂粒をやや含み、色調は浅黄橙を呈する。16は土師器へそ皿で、口径7.6cmに復元できる。調整は外面底部から口縁部下半まではオサエ、口縁部外面から内面はヨコナデが施される。胎土は微砂粒をやや含み、色調は灰白色で焼成はやや良である。17は白系土師器椀で口径11.2cmに復元できる。調整は外面底部から口縁部下半まではオサエ、口縁部外面から内面にかけてヨコナデが施される。胎土は緻密で、色調は灰白色を呈する。18は蓮弁文を施す青磁椀底部である。外面には蓮弁文様を削り出し、内面見込み部はナデ調整を行う。高台外面まで全体に厚い釉が施されるが、底部外面には釉は及ばない。なお、高台内側にトチンの剥離痕跡が残る。素地の胎土は緻密で、色調は灰白色を呈する。

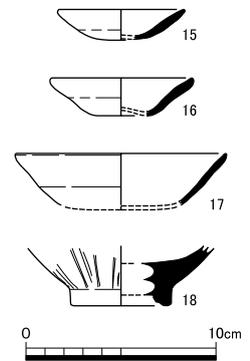


図11 土坑群28出土土器実測図（1：4）

4. まとめ

今回の調査の主な目的は、平安京右京四条一坊九町における六角小路北築地および北側溝の検出と、宅地部分の利用状況の確認であったが、六角小路関連の遺構は検出できなかった。これは、道路関連遺構の存在が予想されていた付近に、室町時代の土坑群28と現代の攪乱があったためである。

しかし、調査区東壁際に、東に展開すると思われる平安時代の建物跡を1棟検出しており、宅地利用の一端を検出することができた。また、発掘調査前に実施した試掘調査では、平安時代の遺構面とともに土坑を検出しており（図4）、この土坑内からは9世紀前半にさかのぼる土器群が一括して出土している（図12）。今回の発掘調査でも遺構には伴わないが、平安時代前期の土器類が中世の土坑群などから多数出土している。これらの事実を考え合わせると、平安時代前期に九町域が宅地として利用されていたことは確実といえよう。

それに対し、平安時代中期以降の遺物はほとんど出土しておらず、遺構も確認できていない。10世紀以降には当町の宅地は衰退し、耕地化していった可能性が高い。室町時代の土坑群の性格は不明であるが、六角小路の推定地付近にあたることから、中世にも土地境界になっていた可能性が高

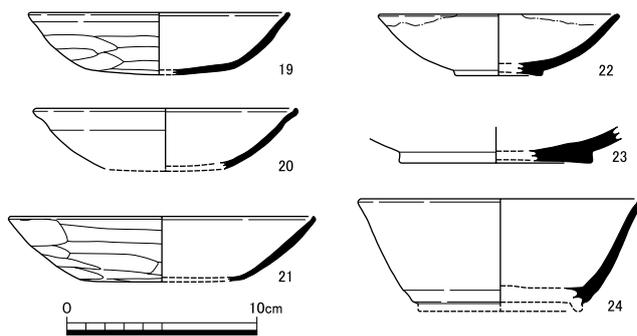


図12 試掘トレンチ平安時代土坑出土土器実測図（1：4）
（19～21：土師器、22：白色土器、23：緑釉陶器、24：須恵器）

く、耕地の境界付近に土取りなど何らかの理由で穿たれたものと考えられる。

当調査地周辺で検出している遺構の密度は非常に希薄であり、まだまだ不明な点が多い。宅地利用の具体的な実態解明や変遷過程、そして六角小路に関連する条坊遺構の確認など、周辺における今後の調査に期待したい。

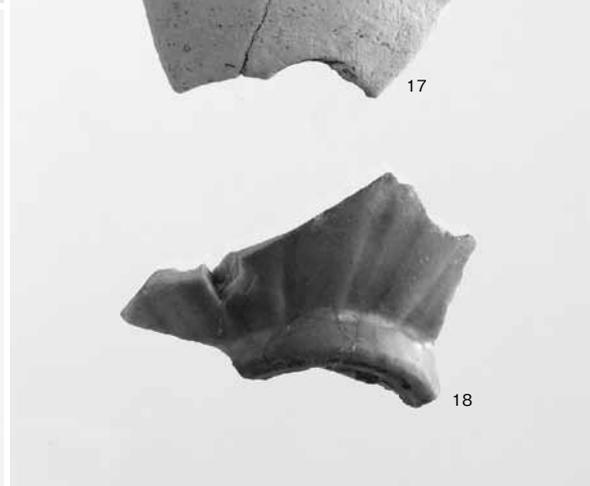
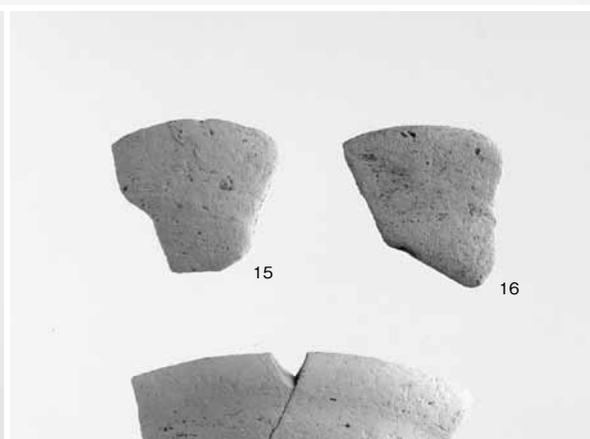
図 版



1 調査区全景（北から）



2 土坑群28（東から）



報 告 書 抄 録

| ふりがな | へいあんきょううきょうしじょういちぼううきゅうちょうあと・みぶいせき | | | | | | | |
|------------------------------------|--|-------|--------------|---|--------------------|-------------------------------|------|------------|
| 書名 | 平安京右京四条一坊九町跡・壬生遺跡 | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 2012-8 | | | | | | | |
| 編著者名 | 金島恵一・網 伸也 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 所在地 | 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1 | | | | | | | |
| 発行所 | 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2012年11月16日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| へいあんきょうあと 平安京跡 みぶいせき 壬生遺跡 | きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 みぶしんめいちよう 壬生神明町 1-48他 | 26100 | 1 462 | 35度 00分 27秒 | 135度 44分 17秒 | 2012年7月 30日～2012 年9月13日 | 240㎡ | 建物建設 工事 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| 平安京跡 | 都城跡 | 古墳時代 | | 土師器、須恵器 | | | | |
| 壬生遺跡 | 散布地 | 平安時代 | 建物 | 土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、黒色土器、白色土器、輸入陶磁器、瓦、土製品 | | | | |
| | | 室町時代 | 土坑群、溝状遺構 | 土師器、須恵器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦 | | | | |
| | | 江戸時代 | 建物 | 土師器、染付 | | | | |

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-8

平安京右京四条一坊九町跡・壬生遺跡

発行日 2012年11月16日

編集
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961